神さまの領域

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

　神さまの領域

【Ｎコード】

Ｎ２４７３Ｇ

【作者名】

　からたちみかん

【あらすじ】

　クリスマス。ユキは彼氏であるハルの実家にきていた。ハルの妹の冬胡の誕生日を祝うために。１年前と9年前のクリスマスの『サプライズ』が、重なり合う。

『死んだら、私は鳥に喰われたい。そうしたら本当の自由になれるから』

「おたんじょうびおめでとう！」

　クラッカーが弾ける音が響く。その音に驚きなら本日の主役である冬胡はケーキの上の蝋燭の炎を吹き消した。

「ありがとう」

　あどけない声で答えると冬胡は取り囲んでいる大人たちを見渡す。

　その姿をユキはあたたかな気持ちで見つめていた。冬胡はユキと目が合うとにっこりと笑う。ハルとそっくりの笑顔。ユキは微笑み返す。

　今日は彼氏であるハルの妹、冬胡の誕生日だった。一緒に行こうと誘われてユキはハルの実家に来ていた。付き合っている彼氏の実家に行く時はいつもドキドキする。彼氏の家族との初顔合わせは勝負である。うまく馴染めるかどうか緊張して胃がキリキリと痛んだ。

　しかし、それは杞憂だった。案ずるよりも産むが易い。ハルの両親も祖父母もみんなユキのことを歓迎してくれた。いい意味で肩透かしを食らった、と、言うべきか。気合を入れてきたのが馬鹿らしく思えるほどハルの家族はおおらかで優しかった。

　さすが、ハルを育てた家族だ。ハルがマイペースでおっとりしているのがわかった気がする。

　そして、何より妹の冬胡がユキに懐いてくれたことが嬉しかった。

「冬胡ちゃん。これ。あたしからのプレゼント」

　ユキは持参したプレゼントを冬胡に手渡した。小学生の女の子に何をプレゼントすればいいのか散々悩んで、これにした。目を輝かせて冬胡はラッピングを解いてゆく。

「あ、かわいい♪」

ユキが選んだのは雑貨屋で見つけたレターセットとペンのセットだった。シンプルで大人っぽい匂いがする文房具。子供の頃こういうものが欲しかった。と、いう懐かしさに駆られて選んだ。

喜んでいる冬胡の表情にユキは安堵する。時代がまるっきり違うのだ。ダザイ（死語？）と、言われたらどうしようかと思った。

「これでユキちゃんにお手紙かいてもいい？」

「うん、いいよ」

ユキはしゃがみ込んで冬胡の視線で頷いた。

「あれ？」

冬胡が首にかけていたシルバーのネックレスが目につく。見覚えがある。卵に天使の羽がついているデザイン。

「このネックレス……」

「フユが産まれたときにハルにもらったの」

嬉しそうに冬胡はネックレスのチェーンをつまんでユキに見やすいように差し出した。

「あたしが去年失くしたのと同じブランドのペンダントだ」

「ユキちゃんも同じの持っているの？」

「持っていたけど失くしちゃったんだ」

「ふーん」

「前に言っていた、失くしたペンダントのことですか？」

いつの間にか側にハルが立っていた。

「うん、そう」

答えてユキは立ち上がる。

「そのペンダントは冬胡が産まれるちょっと前にもらったのです。被服学校に通っていた頃にね、服を作るお金が欲しくてバーでバイトをしていた時期があったのです」

ハルは被服学校を卒業後、大手裁縫具店に就職。その後『お洋服屋さん』というお店を立ち上げてオーダーメイドの服を作っている。

今、ユキが着ている白い毛糸のワンピースもハルのお手製だ。

「その時、会ったお客さんに妹が産まれるという話をしたらお祝いにもらったのです」

「ねえ、それって女の人？」

「もしかして嫉妬しています？」

「してない」

　図星だったけれどユキは速攻で否定した。ハルは含み笑いを浮かべる。

「妹が産まれるってわかっていたの？」

　癪に障りつつ。ユキは話を変えた。

「いえ。何となく。妹だ！　って予感があっただけです。だからベビー服も女の子用のものばかり研究していました」

「あ、やっぱりベビー服作ったんだ」

「もちろんです。はじめての妹ですもの」

「そっか」

「でも冬胡の服が一番難しいです」

「何で？」

「だって冬胡はすぐに大きくなっちゃうんですもの」

「えへへ。フユまた背伸びたよ」

　悶えるように言ったハルに冬胡は笑いながら答えた。

『鳥に喰われて散り散りになった私の肉体は、どこまでも遠く、果てしなく。世界を廻る』

　どうせ驚くならば、いいことで驚きたい。こんな驚きはもういらない。

　どうしようもない状態に雪枝はため息をついた。ため息しか出ない。クリスマス間近の賑やかな街が恨めしい。

　またしても派遣打ち切りの憂き目に合ってしまった。突然、今月

で終了と、通告された。

　契約中の打ち切りはこれで何度目だろうか？　数えるのも嫌になる。せめて期限くらい守って欲しい。しかし、世間知らずの小娘が騒いだって煙たがられるだけである。大人しく黙っていた方が身のためだ。何て気弱なのだろうか。

「またかよ、って感じだよね」

　雪枝はひとりごちる。慣れてしまったというか、ここまでくると怒る気力さえ失せてしまう。不況で荒んだ世の中に精も魂も尽き果てた。心もない。

　もう、いい。好きにして。

「天使のお守りも効果なし、か」

　先日、前々から欲しくて狙っていた天使のネックレスを買ったばかりだった。もうすぐクリスマスだし、今年一年頑張った自分へのご褒美。そんな思いで買った天使のネックレス。しかし天使の加護も虚しく無職、決定。

「どうしろっちゅうの」

　仕事なし。彼氏もいない。最悪のクリスマスではないか。

「こうなったらトコトン飲んでやる！　意識がなくなるほどに飲んでやる！　厄落としに飲んでやるッ！」

　ヤケクソになるしかなかった。

『赤い大地を越えて、緑の山々を抜けて、碧の海を目指し、青い空へ』

　飲み屋街の雑居ビルの地下にバー「ゆぐどらしる」はあった。そこでアルバイト募集の張り紙を見つけたのは一ヶ月前のこと。

　それにしても年末のバーというものはもう少し忙しいものだと思っていた。もうじきクリスマスだというのに今夜も店は閑古鳥が鳴

いている。バイトをはじめて一ヶ月。閑古鳥じゃなかった日があるだろうか？　客はまばらで私はいつも暇をもてあましていた。

　私は掃除をしながらカウンターにいる店の主、ジンさんを見つめる。ジンさんはカクテルグラスを磨いていた。目が合うとジンさんは人を喰ったように不敵に笑う。

「今日もお客さん来ませんね。私が言うのも何ですが、大丈夫なのですか？」

　思わず心配になって聞いてしまった。

「いいんだよ。いつものことだろ？」

「暇なのに、アルバイトを雇っている余裕なんてあるのですか？」

「言うねぇ。気にするな。俺の話し相手させるために雇っているだけだから」

　強がりなのかわからない。ジンさんは軽快に笑っている。

　不意に、揺れたような気がした。地震？

「ハル、客がきたぞ」

「え？」

　と、カラン、カラン、と、店の入口にかけてあったベルが扉の開閉に合わせて鳴り響く。現れたのは二十代半ばの女性だった。すでに出来上がっているようで足元がふらついている。

「大丈夫ですか？」

　あまりにも危なっかしい足取りに私は女性に近づいて手を差し出した。

「らいじょうぶ！　あいがとう」

　呂律が回っていない。高揚した赤い頬が妙に色っぽい。咄嗟に支えた体と触れた手が外気ですっかりと冷え切っている。私は女性をカウンターの席に座らせた。

「いらっしゃいませ」

　ジンさんは恭しく頭を下げる。

「お酒。おさけちょうらーいい」

　調子の狂った声を張り上げると女性は軟体生物のようにカウンタ

ーに突っ伏した。

「はい、かしこまりました。それでは当店自慢の逸品を。ハル。今夜の仕事はそちらのお客様のお相手だ。隣に座れ」

「え？　お相手ですか？」

「女性が意識を失うほどに酔いつぶれるということはだな。よっぽどのことがあったに違いない。女性の悩みを聞くのが世の男性の勤めだ」

　わかるような、わからないようなことを言ってから、ジンさんはカクテルの用意をはじめる。ふっと、空気が変わった。ジンさんがカクテルを作るときはいつもそうだ。独特の雰囲気が漂う。不思議だ。

「そうよ、聞いてよ！！　あたし何も悪いことしていないのにぃ！」

　ジンさんの世界に引き込まれそうになった瞬間、女性の金切り声で現実に戻された。驚いて女性の方を振り返る。女性は堰を切ったように話しはじめた。

　呂律が回っていなく酔っているせいか話が飛ぶ。要約するにリストラされて自棄酒しているらしい。学生の身としては、社会人というのは本当に大変なのだと思い知らされる。

「あたしなんて何の価値もない女なのよ。生きていたってしょうがないのよ」

　あげくの果てに泣き出してしまった。どう慰めていいのかわからずおろおろしてしまう。

「ハル。お前はハンカチを出すなり、胸を貸すなり出来ないのか？」

　と、ジンさんに突っ込まれてしまった。ジンさんはすかさず女性の前に赤色のカクテルを差し出す。カシスの赤だろうか？　魅惑的な色だ。しかし未成年でお酒の飲んだことのない私には、どんな味なのか想像もつかない。その前に未成年がバーで働くこと自体、間違っているかもしれないけれど。

「お客様、コチラのカクテルをどうぞ。それにもしよろしければ、こいつの胸をお貸ししましょう。どうぞ好きに使ってください」

「うわぁぁぁぁん」

ジンさんが言うと女性は私の胸にしがみついて泣き出した。みるみる女性の顔は涙で化粧が剥げ落ちていく。涙だけではなく鼻水までがシャツに染み込んで湿っぽくなる。すさまじい光景なのに服を握りしめる女性の手の力に思わずキュンとしてしまった。

沸き上がってくる愛しさがくすぐったくて、どこか懐かしい。

「大丈夫ですよ。思いっきり泣いて吐き出しちゃってください」

私はそっと女の人の髪を撫でた。ふんわりと匂いが漂う。女性の香だろうか？　導かれるように私の目の前に違う景色が広がってみえた。

ずっと胸に溜まっていた想いが解けていくように。

唐突に、みえた。

ずっとスランプだった。

念願の被服学校に入学したのは今年の四月だった。はじめのうちは授業も楽しくて、新しい技術を身に付けていくことが嬉しくてたまらなかった。それがいつの頃からだろうか？　進むべき方向性を見失って迷いはじめたのは。

迷いがそうさせるのか、服のデザインがまったく浮かばなくなった。以前は何も考えなくても出来ていたのに。それまで人の肉がみえているかのように描けていたものが、手の平からこぼれ落ちるように消えてしまった。

自分の才能は、こんなものだったのだろうか？

それでも無理矢理、服のデザインを描いて、パターンを切って服を作った。しかし、イメージと異なったものばかりで、納得のいく作品とは程遠い。

布代が欲しいなんて名目にすぎない。

バイトをはじめたのはそんな状況から逃げ出したかったからだ。

ただ、感じればいい。

直感的に言葉が脳裏に浮かぶ。

顔を上げるとジンさんと目が合った。女性はまだ胸の中で泣いて

いる。一瞬だったけれども夢を見ているようだった。呆けているとジンさんは静かに頷く。

見透かされている。

そんな気がした。

けれどもジンさんだったら、人の心が読めてもおかしくないような気がした。

『やがて私の記憶は空気の中に解けて逝く』

体が重い。薄暗い部屋の中で目覚める。寝返りをうとうとした瞬間、吐き気に襲われた。雪枝は大急ぎでトイレに駆け込む。便器に頭を突っ込んで胃の中のものを吐き出した。

吐けども沸き上がってくる吐き気にうんざりする。黄色い胃液が忌々しい。

これ以上吐けないまでに吐いてから雪枝はトイレから這い出す。酷いものだ。

それにしても夕べは、どうしたのだろう？

雪枝は記憶を辿った。

リストラされた勢いで自棄酒をして、本当に記憶がすっ飛んでしまった。記憶が飛ぶなんてはじめての経験だ。どうやって家に辿り着いたかもわからない。服も着たまま、化粧もしたまま（すっかり剥げ落ちてしまっていたけど）寝てしまったようだ。

よく無事に帰ってきたものだ、と、雪枝は呆れ返った。放り投げてあった鞄の中身を確認する。ちゃんと財布も入っているから大丈夫。財布の中身は怖くて見る気は出なかったけれども。

無事に家に帰ってきたのだ。それだけで儲けものだと思わなければ。

と、心の中で呟いて台所の床に転がる。固くて冷たいフローリン

グ。近頃、忙しくて掃除していなかったから埃だらけだ。しかも寒い。動きたいけど二日酔いの頭痛で思うように体が動かなかった。

これが噂に聞く二日酔いか。

呟いた声は声にならなかった。

反省。

（そうだ、ネックレス）

雪枝は手を首もとにもってゆく。買ったばかりのネックレスは無事だろうか？　しかし、首に触れるだけでそこに金属のチェーンはない。

「うそぉ」

首と喉元をぐるりと触ってみても、買ったばかりのネックレスはなかった。

「失くした？」

ショックで更に落ち込む。

「いや、待って」

記憶が引っ掛かる。

酔った勢いで誰かにあげたような？　頭痛が邪魔して思い出せない。

「もう、いいや」

しかし、どうでもよくなって雪枝は考えるのをやめた。

ノロノロと起き上がる。

今日一日はフテ寝する。それくらい凹んだってバチは当たらないだろう。

「多分、きっと」

呟いて雪枝はベッドの中に潜り込んだ。

『還ろう、還ろう。貴女のもとへ。赤い螺旋を辿ってもう一度、貴女から産まれ堕ちる』

「ハルのウチのクリスマスっていいねぇ」

「でしょ」

　冬胡の誕生日もお開きになり、片付けが終わるとふたりは二階にあるハルの部屋に引き上げた。ユキは上機嫌でベッドの上に腰を降ろす。そんなユキを見てハルは実家に連れてきてよかったと思う。

　ハルの部屋はこざっぱりとしていて、全体的に暖色系の色で統一されていた。壁と天井の木目があったかみを感じさせる。

　ハルはユキの隣に腰を降ろした。

「お得な感じがするね。クリスマス・イブにパーティーやって。クリスマスには冬胡ちゃんの誕生日でしょ。二日続けてパーティーって楽しいね」

「楽しんでもらえてよかったです」

「来年も呼んでネ」

「もちろん。イヤって言っても連れてきますから、ネ」

　ハルはユキの肩に手を置いた。

「それにしても気になるんだよね」

　ポツリ、と、ユキは呟く。

「どうしたのですか？」

「おかしいなぁって思って」

「何がです？」

「冬胡ちゃんのペンダント。あたしが失くしたのにそっくりなんだよね」

「同じ種類のものではないのですか？」

「うん。ブランドは同じだよ。でもね、あたしが失くしたの、去年の限定品なの。だからおかしいなぁ、って。シリーズで似たようなものあるのかなぁ？」

　ユキは天井を見上げていた。視線は天井の木目を追っている。

「もしかしたら」

　そこまで言ってハルは一呼吸置いた。

ユキから天使のペンダントの話を聞いてから、引っかかっていたことがあった。

「もしかしたら？」

　ハルの言葉にユキは首を傾げる。

「同じものだったりして」

　沈黙。

「んなわけないじゃん」

「ですよねぇ」

　見つめ合ってふたりは笑い転げた。

「でもね、そんな風に思ってしまうほど、あそこのアルバイトは不思議で面白かったのですよ。一ヶ月で終わっちゃいましたけどね」

「そうなの？」

「冬胡の出産に合わせて休みをもらって帰郷したのです。で、冬休み明けに戻ったらバーは潰れていました」

「マジで？」

「バイト料もまだもらっていなかったので、さすがに落ち込みました。暇でちゃんと働いていたとは言い難い状態でしたけど、どうにも後味が悪くて」

「確かに、タダ働きはキツイね」

「それが、しばらくしてジンさん、店のオーナーから現金書留で給料が送られてきたのです。嬉しかった。しかもいくぶんか色がついていました♪」

「なんだ。よかったじゃない」

　ハルは思い出す。

　書留にはリターンアドレスもなく手紙もついていなかった。けれど、ジンさんらしいような気がする。わざわざ理由を言う人ではないのだ、あの人は。

　風の噂でジンさんはヤクザに追いかけられて高跳びしたとか。色々話は聞いた。しかしどれひとつ、本当の話ではないだろう。

　あれから九年。ジンさんには一度も会っていない。あの一ヶ月は

まるで夢のように儚い。

　あのペンダントだけが、現実の証。

「ねえ、ペンダントくれた女の人ってどんな人だったの？」

　ユキの問にハルは記憶を辿る。印象深い出来事なのに、はっきりと思い出せない。

「あまり、覚えてはいませんね。ただ……」

　ハルはユキの顔をじっと見つめる。

「何となくですけど、ユキちゃんに雰囲気似ているかもしれませんねユキちゃんはペンダント失くした時のことまったく覚えていないのですよね？」

「恥ずかしながら、お酒飲んで記憶飛んじゃっています。でも、少しだけ。覚えている」

　ユキは言葉を区切った。少し、考えて言葉を選び出す。

「散々泣き喚いて、誰かに介抱されていたような、気がする」

「こんな風に？」

　そういうとハルはユキの体を抱き寄せた。

　懐かしいような、気がした。

　私は、このぬくもりを知っている。

「そう、かも」

　頷いてユキはハルの体に身を任せた。

　ユキを抱きしめながらハルは思う。自分から好きになって告白したのはユキがはじめてだった。

　今までの女性とのお付き合いは告白されてばかりである。来るもの拒まず去るもの追わず。と、言ったところか。

　それがユキのことはこんなにも好きで。大好きで。自分が出来ることならば何でもしてあげたい。自分なしじゃ生きていけないくらいにしてしまいたい。

　そこまで好きになった女性ははじめてだった。

　ずっと、待っていた。逢いたかった。

　抱きしめていたユキから匂いが蘇る。

あの時と同じ香り。
驚くほどに世界がクリアにみえる。
感じた想いが。
脳裏に声が響く。
これが、神さまの領域。
唐突に閃いた。
人生は驚きという気づきの連続だ。
ハルは、感じていた。

歌声が聞こえる。
光が。

部屋のカーテンの隙間から白いものが見えた。ユキはハルの腕からすり抜けると窓辺に近づく。カーテンを開くと雪が降っていた。

「ハル！　見て。雪が降っている！」

思わずユキははしゃいでいた。ハルの方を振り返る。ハルはぼんやりとした表情をしていた。が、それは一瞬だった。ユキの声に気づいて呆れ顔で笑う。

「雪枝さんなのに雪がめずらしいのですか？」

「だって。名前は雪枝だけど雪国育ちじゃないもん」

言ってユキは唇を尖らせた。そんなユキの側にハルは歩み寄る。

ハルは、ポケットに手を入れた。

いつ渡そうか、タイミングを窺っていた。少し前に、ユキから天使のネックレスの話を聞いたときから、探して見つけたものを。

握りしめる。

「懐かしいです。雪は。こっちで暮らしていた時は雪掻きするのが大変で冬は苦手でした。でもたまに帰ってきて雪を見ていると落ち着きます」

静かに雪は降り続ける。

「ユキちゃん」

「何？」

ハルは手早い動きでユキの左手を取った。あっと思った時には薬指に指輪が嵌っていた。

「ハル、これ？」

ユキは驚いて指輪を見つめる。卵に羽が生えている天使の指輪。ネックレスと同じブランドのものだった。

「婚約指輪には安いかもしれませんけど。私と結婚していただけませんか？」

ハルの言葉に息が止まりそうになる。

どうせ驚くならば、いいことで驚きたい。

あのどん底から一年。

こんな驚きは二度とない。

「ハルのバカ！」

思いがけないサプライズにユキは叫んでいた。泣きながらハルの体にしがみつく。声を上げてユキは泣いた。興奮と喜びで、言葉にならない。

「幸せにしますよ」

「絶対……だからね」

「約束します」

ハルは泣きじゃくるユキを受けとめた。

しっかりと、強く。

『貴女を幸せにするために、私は生まれ変わる。何度でも』

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2473g/

神さまの領域

2010年10月8日15時08分発行

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。